カントとヒューム

―カントの「ヒューム超克」をめぐって―

高知丸の内高等学校　寺尾隆二

カントは『プロレゴメナ』序文で、「ヒュームの超克」を宣言している。カントは、ヒュームが因果の概念は構想力の私生児にほかならないのに、理性は誤ってこの概念を自分の実子と考えるのだと推論したのに対し、因果性の概念がヒュームの憂慮したように経験からではなく、純粋悟性から生じたものであることを確信し、この概念の客観的妥当性を先験的演繹論によって示したことで、ヒュームの因果性に対する懐疑に十分の自信をもって論駁し、このことから「わたしたちは、今やヒュームの懐疑を根底から取り除くべきところに達した」と、先の「ヒューム超克」を導きだしたのである。

しかしながらいますこし視野を広げるならば、「カントはヒュームを越えた」とする説に異を称える解釈もある。W.シユテークミュラーは「今日の科学理論家たちは基本的に、カントではなく、ヒュームの方が正しいと考える。」と云っている。このような親ヒューム的意見は、実はカントの生前当時からあったのである。

「北方の魔術師」と呼ばれた J.G.ハーマンは、1758 年のロンドン旅行でヒュームの思想を知ってから、啓蒙的合理主義を拒否し、理性の扱いを巡ってカントと対立する。ハーマンにとっては、自己認識のための感情と信仰が第一義であり、理性的抽象による思索は「スコラ的冗舌、街学的態度及び空虚なる言葉に囚われている」との主張である。ハーマンはヒュームの懐疑主義を知ることでいっきに神秘主義へと突き抜けてしまった。そしてハーマンと親交のあった感情哲学者 F.H.ヤコービは、たとえどんなに簡単な知識においても理性は無能力であるという自説を正当化するために、反カント的な『デヴィド・ヒュームの信仰論、観念論と実在論』(1787)を発表している。このように同時代においてさえ、ヒュームを論拠に神秘主義や懐疑主義的立場からカント哲学を論駁しようとしていることは「カントはヒュームを越えた」との意見を(これはカント自身の宣言でもあるのだが)、先に述べたような単純な図式で捉えることを思い止まらせる。

そこで本稿では、ヒュームの因果律批判に、つまり因果性の成立に対する問いに真正面から答えようとした「カントにとってヒュームとは、ある時期に越えてしまった存在ではなく、むしろ、カントの思索を晩年にいたるまで背後からつき動かす原動力となった存在である」とする黒崎政男氏の「カントにおけるヒユーム問題」を手引きに「カントのヒューム超克」をまとめなおしてみたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それでは因果性についてのカントの実質的な考察はいかなるものかを、ヒュームに対する直接的な言及はないが、『純粋理性批判』「原則論」の「経験の第二類推」の章からみてみよう。ここでのカントの論述は「因果律に従う時間的継起の原則」として、「あらゆる変化は原因と結果との結合の法則に従って生ずる」の証明のためになされている。以下に基本的な議論の運びをみてみよう。カントは「単なる知覚を通じてでは、たがいに継起する諸現象の客観的関係はあくまでも規定されないままである。」とし、あるいは「諸知覚の連結のいかなる必然性もそれらの諸知覚自身からは明らかにされえない」を基本的前提として認めている。だから、もし諸知覚から一つの規則を発見するというような「帰納

に根拠をもつ」ような立場では「原因という概念はたんに経験的なものになってしまい、経験自身と同様、偶然的なものとなってしまうだろう」と述べている。しかしながら注意したいのは、ここでのカントの経験自体は偶然的であって、必然性を有しないとの前提が、実はヒュームと共通の前提であり、そこから両者が正反対の結論を引き出したことである。因果性の客観的妥当性をヒュームの場合には否定し、カントは肯定したのである。カントはヒュームと共通の前提から、異なる方向に議論を進めたわけである。

その方向の違い、あるいは問題のたてかたの違いといったものを浮かび上がらせてくれる、ヒュームが因果性についてたてた二つの問いをみてみたい。

「第一に、存在に始まりがあるすべてのものは、また必然的に原因をもつ、と明言するのはいかなる理由によるのか。」

「第二に、しかじかの特定の原因は必然的にしかじかの特定の結果を伴わねばならぬと断定するのはなぜか。また、一方から他方へと導く推理の本性、およびこの推理を信頼する信念の本性はなにか。」

この二つの問いは、因果性の普遍的観点と個別的観点とをヒュームがもっていたことを示している。第一の問い、われわれがすべての出来事は必然的に原因をもつと思うのはなぜであろうかについての考察は、存在の始まりと原因との間の関係は事実関係ではありえても観念間の関係ではなく、つまりア・プリオリな関係でなく、したがってそれは論理的に証明することも反証することもできないとしている。ヒュームにとっては、すべての相互に判明に区別しうる観念は相互に分離しうるのであるから、原因の観念は結果の観念から明白に区別しうるものである。このことは原因観念と、あるものの存在の始まりという観念との分離を示す。

すなわち、すべての出来事は原因をもつという命題は、直観的にも論証的にも確実ではなく、それゆえわれわれが因果関係の普遍性についてもつのは信念であり、その信念は経験から生じるとする。そしてその信念が、経験からどのようにして生じるのかを問うのが第二の問いであるが、それはいまはおく。

ヒュームは第一の問いで、因果性一般が普遍的妥当性を有することを論理的に示しうるとする議論を却下する問いを立てたのである。この問いに対してカントは、因果法則は経験一般の成立条件として客観的妥当性を有すると答えたのである。カントは云う「いかにしてわれわれは、これらの諸表象に客観を定立することができるのか、いいかえれば、心の変様として諸表象の客観的実在性を越えて、それらに客観的実在性を付与することができるのだろうか」と。そしてこれに対する解答は、純粋悟性概念に求められる。つまり、単なる知覚によるだけでは、継起する諸現象の客観的関係は規定されえないのであり、この関係が規定されたものとして認識されるための「総合的統一の必然性をおびている概念は、純粋悟性概念だけである」とカントは述べる。それゆえ、「次のことによってのみ、つまりわれわれが諸現象の継続を、したがってすべての変化を、因果性の法則に従わせることによってのみ、はじめて経験、つまり諸現象についての経験的認識が可能になるのである。」とするのである。すなわち、もともと因果性の法則が根底に存しているからこそ経験的認識がはじめて可能となるのだから、経験の成立条件としての因果性の法則の客観的妥当性はゆるがないというのが、カントのヒュームの第一の問いに対する解答となろう。

この議論を支えているのは、カント哲学における要石としての現象と物自体の区別であ

る。「諸現象が物自体そのものであったとすれば、誰も、多様なものの諸表象の継起から、これが客観においてどのように結合されているかを推測することはできない」わけであるから、「物自体がどんなものであるかは、まったくわれわれの認識の圏外」にある。だからカントによれば、「客観」とは「現象において、把捉の必然的規則の条件を含んでいるところのもの」にほかならない。

この「認識が対象に従う」のではなく「対象が認識に従う」とする、コペルニクス的転回をつうじて、カントのヒュームに対する解答が可能になったのである。カントは、もともと認識の構成要素でありながら「経験に依存せず、感覚の印象になんら依存しない認識」としてのア・プリオリなものを、ヒュームのように心のなかにあるものとせずに厳密に洗い出し、その適用を現象に限定して、物自体を認識できないとし、ア・プリオリのカテゴリーが対象に適用できる可能性の条件を定めることに思索をこらしたのである。

カントにとって自然科学も形而上学も、およそ学と名がつくかぎりのものを支えている判断形式は「ア・プリオリの総合判断」である。総合判断とは主語の内容を拡張して、述語に新しいものをつけ加えている判断である。これに対し「物体は広がりをもつ」という判断は、主語を述語で説明しているだけである。この種の判断は分析判断と云われ、ア・プリオリな認識として必然性と普遍性とをもちうるる。しかしこれはつきつめれば、A=Aとなってしまう。したがって分析判断は、単に主語概倉の申に含まれている意味を明らかにするだけであって、新たに認識を拡張し増大せしめるものではない。それ故総合判断こそ学問的に意義のある判断である。かくしてカントによれば「アプリオリの総合判断」こそが真に学問的意義をもちうるのである。なぜならば分析判断はア・プリオリではあるが、総合判断ではなく、経験的認識は総合判断ではあるが、ア・プリオリではなく学問的認識として厳密な確実性を要求できないからである。自然科学と形而上学の学問性を取り戻すには「ア・プリオリの総合判断はいかにして可能か」という問いに答えをださねばならない。

経験論はすべての認識は「経験と共に」始まるという。これに対してカントは、たしかにそうではあるが、だからといって、そのことはすべての認識が「経験に基づく」ことをいみするのではない、という。すなわちわれわれの主観のうちには認識の先天的諸形式があり、これらによって認識は構成されるのである、と説く。

認識は質料と形式とからなる。質料はたしかに対象的なものがもたらすのであるが、それを加工整理して認識にしあげるのは主観の側にあるア・プリオリの形式である、というのである。ア・プリオリの形式としてあげられているのは、感性のア・プリオリの直観形式としての空間・時間と悟性のア・プリオリの概念形式としての 12 個のカテゴリーである、認識は感性の直観と悟性の概念との共働によって成り立つ。

すなわち「感性なくしては対象は与えられず、悟性なくしては対象は思推されない。内容なき思惟は空虚であり、概念泣き直観は盲目である」。このことはわれわれの認識が経験的世界に限定されることを意味する。なぜなら感性的直観は常に経験的であるからである。経験的世界は主観のア・プリオリの形式によって構成された世界、主観に対して現象している世界であって、主観から独立な「物自体」の世界ではない。こうして「現象」と「物自体」の区別を設けることによって、ヒュームがたてえなかった「ア・プリオリの総合判断」の可能性を基礎づけ、学問的知識の客観性を回復しえたとカントは信じたわけで

ある。

そこで問題となるのは第二の問いである。第二の問いを要約すれば「われわれは、ある特定の出来事が因果的に連関しているとなぜ考えるのか、そして、われわれが出来事の一方から他方へと推論を行なう推論の本性はいかなるものか」である。ヒュームは因果性の問題を信念の問題としてとらえている。それゆえヒュームの議論は、特定の因果連関をわれわれが信じるにいたるのはなぜかを、心理的主観の問題として追求していくことになる。

ヒュームにとってはいかなるものもそれ自身の観念のうちに他の事物の存在を含まないから、原因から結果、結果から原因という推論は個々の事物をいかに吟味しようともえられない。原因と結果の必然的な結びつきは、ヒュームにおいては、推論する人の心のなかに移されている。ヒュームは個別的・具体的な因果関係の必然性を、主観的なものにとどめることで、逆にその必然的な因果関係を信念の推論により成立させようとしているのである。　ヒュームは常識の世界の中で常識の範囲での因果関係の成立を問いかけているのであり、ヒュームとって、具体的に経験的認識を規定する場合には偶然性がともなうことは自明のことなのである。

それではカントのヒュームに対する評価はどうであろうか。カント自身の言葉を引いてみよう。「私は確かに経験なしでは、結果から原因を、あるいは原因から結果を、ア・プリオリにつまり経験に教えられることなくしては規定的には認識できない。が、しかし、何ものかが恒常的法則によって引きつづいておこるためには、あるものが先行していたのでなければならない。ということはア・プリオリに認識できるのである。したがってヒュームは、法則によるわれわれの規定が偶然的であるということから、あやまって法則それ自体が偶然的であると推論したわけである。」とし、「ヒユームは、つねづね極めて明敏な人であるにも拘らず、やはり懐疑論的誤謬を犯したのである。」「そこで彼もまた懐疑論が必ず受けねばならぬ打撃を被らざるを得なかった、それは－－－彼自身の所論がまた疑われる、ということである。」が、その評価である。

ここで述べられている中で「法則によるわれわれの規定が偶然的であるということから、あやまって法則それ自体が偶然的であると推論したわけである。」に注意してみよう。この場合、カントの云う「法則によるわれわれの規定が偶然的である」とは、因果性の法則が経験を成立させるア・プリオリな条件であっても、個々の経験的認識の具体的な因果関係までを規定しうるものではないとみているととれる。この個別的経験的認識について、カント『純粋理性批判』の「先験的論理学緒言」「論理学一般」での論述をみてみたい。

カントは、一般論理学をア・プリオリな原理のみを論究し悟性の規準となる純粋論理そこで問題となるのは第二の問いである。第二の問いを要約すれば「われわれは、ある特定の出来事が因果的に連関しているとなぜ考えるのか、そして、われわれが出来事の一方から他方へと推論を行なう推論の本性はいかなるものか」である。ヒュームは因果性の問題を信念の問題としてとらえている。それゆえヒュームの議論は、特定の因果連関をわれわれが信じるにいたるのはなぜかを、心理的主観の問題として追求していくことになる、ヒュームにとってはいかなるものもそれ自身の観念のうちに他の事物の存在を含まないから、原因から結果、結果から原因という推論は個々の事物をいかに吟味しようともえられない。

原因と結果の必然的な結びつきは、ヒュームにおいては、推論する人の心のなかに移さ

れている。　ヒュームは個別的・具体的な因果関係の必然性を、主観的なものにとどめることで､逆にその必然的な因果関係を信念の推論により成立させようとしているのである。ヒュームは常識の世界の中で常識の範囲での因果関係の成立を問いかけているのであり、ヒュームとって、具体的に経験的認識を規定する場合には偶然性がともなうことは自明のことなのである。

それではカントのヒュームに対する評価はどうであろうか。カント自身の言葉を引いてみよう。「私は確かに経験なしでは、結果から原因を、あるいは原因から結果を、ア・プリオリにつまり経験に教えられることなくしては規定的には認識できない。が、しかし、何ものかが恒常的法則によって引きつづいておこるためには、あるものが先行していたのでなければならない。ということはア・プリオリに認識できるのである。したがってヒュームは、法則によるわれわれの規定が偶然的であるということから、あやまって法則それ自体が偶然的であると推論したわけである。」とし、「ヒユームは、つねづね極めて明敏な人であるにも拘らず、やはり懐疑論的誤謬を犯したのである。」「そこで彼もまた懐疑論が必ず受けねばならぬ打撃を被らざるを得なかった、それは－－－彼自身の所論がまた疑われる、ということである。」が、その評価である。

ここで述べられている中で「法則によるわれわれの規定が偶然的であるということから、あやまって法則それ自体が偶然的であると推論したわけである。」に注意してみよう。この場合、カントの云う「法則によるわれわれの規定が偶然的である」とは、因果性の法則が経験を成立させるア・プリオリな条件であっても、個々の経験的認識の具体的な因果関係までを規定しうるものではないとみているととれる。

この個別的経験的認識について、カント『純粋理性批判』の「先験的論理学緒言」「論理学一般」での論述をみてみたい。カントは、一般論理学をア・プリオリな原理のみを論究し悟性の規準となる純粋論理学と、経験的原理を含む経験的条件のもとで悟性を使用する規則としての応用論理学とにわける。そして純粋論理学を本来の学、応用論理学を常識の浄化剤にすぎないとして確実に論証された真の学たりえないとする。つまり、「応用論理学は悟性およびその必然的使用を、具体的に、つまり主観の偶然的な諸条件のもとにあるそれらをあつかうが、この偶然的な諸条件は悟性の使用を妨害したり促進したりする」から、かかる応用論理学は、注意や注意を妨げるもの、注意の結果、誤謬の出どころ、疑惑や懸念あるいは確信などの状態を扱う学というわけである。

すなわちこの論法でいけば、カントは経験をそもそも基礎づける先験的次元での因果性と経験的諸認識での具体的な因果法則との使用を区別しているわけである。つまりカントは経験をそもそも基礎づける先験的次元での因果性を問題とし、ヒユームが批判しようとした個別的具体的経験の次元での因果性の妥当性の問題は、最初から除外されていわけである。ヒュームにとっては、因果性一般が普遍的妥当性をもつかどうかといった、形而上学的原理としての因果性の概念については関心がないのである。そこで黒崎氏はヒュームとカントの因果性に対する問題のたてかたのずれを指摘するとともに「カントは経験的認識の場での偶然性を救うべく努力がつづけられた」とする。

カントの晩年まで「因果律批判」が働いたかの是非はおいても、因果性の概念を普遍的観点と個別的観点とに区別して考えることは、たとえばカントとハーマンやヘルダーとの対立を考えるときに有効な示唆を与えてくれるものである。すなわちハーマンらがヒュー

ムの懐疑論をもってカントを批判したのは、普遍的に妥当する原則を重んじるか、直観や個別的事例の強調かの対立だからである。しかし「ヒュームによって独断の夢を覚まさせられた」と述べている言葉が、ヒュームによって因果律の必然性が単に習慣に基づく主観的必然性にすぎないとされたことに、新たにその客観的必然性を基礎づけねばならないと目覚めさせられたことを意味するとされる限りでの議論は、カントに対するヒュームの影響を観るのにやや狭いように私には思える。

わたしはヒュームの影響を、もうすこし幅の広いものとして考えたい。1765 年の講義公告で「一切の道徳性の第一根拠の探求においては一番進んでいるところの」、と評されたヒュームの道徳感情論からの影響、そして若きヘルダーがルソーの熱情に浮かされたとき、カントは「実り豊かな精神がもはや青春の感情の熱っぽい動きにあまり駆り立てられることなく、静かではあるが感受性に満ちて、いわば哲学者の瞑想的生活のような落ち着き」をえるよう諌め、そしてこのような「心情のあり方」(Gemütsverfassung)をもつ最高の人としてヒュームの名を挙げている。それはカントみずからが、知的雰囲気全体からみればヒュームに近いと感じていたからこその忠告であろう。

ヒュームは、『人性論』の冒頭部分で次のように書いている。「人間の科学は、ほかの学問にとっての唯一の基礎である」。そして「唯一の人間の科学」とは「人間の本性」である。しかし重要であるにもかかわらず、この学問は「これまでもっともないがしろにされてきた」。それゆえ「これをいま少し時流にのせてやること」こそが自分の務めなのであり、時代の務めなのであると。ヒュームに代表されるこういった精神のあり方を、P.ゲイは「神経の回復」と呼んでいる。そして次のように特徴づける。「神秘主義の衰退、生への希望の増大 、努力に対する信頼の回復、探求と批判への積極的参加、社会改革への関心」がそれである。カントはこうした「心のあり方」をこそヒュームから学んだのであろう。そして、単に方法についてだけでなく哲学の本質についてのカントの理解、そしてさらに人間の現存在の根本課題としての啓蒙についての理解も、ヒュームとの出会いによって変えられたのではなかろうか。

参考文献

世界の名著『カント』中央公論社
世界の名著『ヒューム』中央公論社
カール・フオーレンデル、栗田賢三他訳『西洋哲学史』第 2 巻、岩波書店、1943 年.
ヴィルヘルム・ヴィンデルバント、豊川昇訳、『西洋近世哲学史』第 2 巻、新潮文庫、1956 年.
バートランド・ラツセル、市井三郎訳、『西洋哲学史』第 3 巻、みすず書房、1970 年.
黒崎政男、「カントにおけるヒューム問題」『日本哲学会編・哲学』第 35 号、法政大学出版局、1985 年.
ピーター・ゲィ、中川久定他訳『自由の科学――ヨーロッパ啓蒙思想の社会史』第一巻、ミネルバァ書房、1982 年.